

「超音波診断」第2版

日本超音波医学会 編

埼玉工業大学・基礎工学課程

飯 沼 武

先日、本書の編集委員長である竹原靖明先生から書評を書くようにとの御依頼を受けた。実は私は超音波医学には全くの門外漢であり執筆には適さないものと思うが、あえてお引き受けしたのは次の理由による。

本書の初版の編集委員長・福田守道先生とは厚生省のがん研究助成金の班会議で長く画像診断の有効性の定量的評価の研究を行ってきた。その中で福田先生はもちろん超音波画像を担当され、私たちはX線像やCT像を用いた各種の悪性腫瘍の診断における正診率をROC解析やBVC解析を駆使して比較した。その研究グループで私は福田先生をはじめとする超音波医学の専門家たちの並々ならぬ熱意を感じたのである。超音波診断は私たちが専門とするX線診断に比較すると歴史の浅い画像診断法であるため、超音波医学の先生方は何とか画像の画質を向上させ、X線診断に迫ろうとする意気込みがあったように思う。その当時でも肝細胞癌の診断では超音波像のほうがCT像に勝っているとい

う結果を得たように記憶している。

本書を読んでもと、超音波診断は押しも押されぬ画像診断の重要な一翼を担うようになったことは明らかであり、循環器領域、腹部領域、産婦人科領域などでは超音波が第1選択となる疾患も多い。超音波医学会が「超音波医学—基礎から臨床まで」を刊行した創設当初から現在の「超音波診断」に至るまでの発展の過程で菊地喜充先生をはじめとする多くの先生方が払った努力が現在の超音波医学の隆盛をもたらしたのと言えよう。

本書は超音波医学の物理的基礎から始まり、中枢神経、眼科、耳鼻科、歯科領域、体表臓器としての乳房、甲状腺、循環器領域、呼吸器領域、腹部領域、泌尿器科領域、産婦人科領域、整形外科領域および皮膚科領域の超音波診断の最新の情報が見事な画像と共に網羅されている。特に整形外科と皮膚科領域は第2版で新たに加えられたものである。また、新しい技術としてのドプラ法のカラー写真も多く取り入れられている。

付録には医用超音波用語、超音波断層法の表示方法、超音波診断基準など学会の編集でなければ記述しない重要なコンセンサスが含まれているのも大きな特徴と言えよう。超音波医学会の指導者の方々の努力に敬意を表すると共に、超音波医学会会員にはもちろん、それ以外の関連領域の医師、研究者にとっても本書はすばらしい参考書となるであろう。

最後に画像医学の研究者の1人として今後の超音波医学の専門の方々一言申し上げると、患者の立場に立てば検査は少ないほど有難いわけであるから画像検査もよい意味での競争が必要であり、他の画像診断の動向にも常に目を向けていただきたいということである。これからも正診率の定量的評価を通じて、超音波診断のほかの画像診断に対するチャレンジが続くことであろう。

● B5 頁992 図449 写真1162
原色図167 1994 定価22,660円
(税込) 〒600

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)